平成 28 年 8 月 20 日版

【鉄道唱歌】（明治 33 年 5 月）地理教育鉄道唱歌　東海道編（一番のみ）
♪　汽笛一声　新橋を　はやわが汽車は　離れたり
　　愛宕の山に入り残る　月を旅路の　友として

【身延線鉄道唱歌】　　作詞　小澤　肇　　推敲協力　身延線鉄道唱歌の会　　（作曲　多　梅稚）

1　汽笛一声　富士駅を　我が乗る列車　離れたり　　三十九駅　九十粁　普通列車の旅とせん

2　柚木　竪堀　入山瀬　近代製紙の発祥地　　三大仇討ち一つなる曽我兄弟の　寺社もあり

3　右に霊峰仰ぎつつ　富士根にたなびく　雲の帯　　富士宮は　登山口　浅間大社に湧き水に

4　西富士過ぎれば左に見える　安居山あたりの海の砂　　川もないのに沼久保で　しばらく富士山さようなら

5　三大急流富士川に　沿って行きます芝川　　筍　梅の産地なり　水とみどりに富める町

6　戦国武将　信長公　首塚　西山本門寺　　平家の若武者維盛の　お墓が稲子の奥にあり

7　稲子で駿河を後にして　甲州十島良いところ　　昔は身延路御番所で　今は電車で自動車で

8　井出ては寄畑内船へ　南部の火祭り空焦がす　　奥州南部の祖の地なり　威風は今に伝えらる

9　身延の駅に降り立ちて　日蓮宗の総本山　　五重塔の再建に　枝垂れ桜木花添える

10　信玄公の隠し湯の　下部で疲れ癒されん　　湯の奥甲州金山は　武田氏支えた軍資金

11　全国各地に木像を　遺せし　木喰上人の　　生まれは一ノ瀬　微笑館　山の上でも人絶えず

12　市ノ瀬久那土甲斐岩間　印章で名高き里にして　　向いの西島和紙づくり　書家の望みの叶う町

13　視界が開けて鰍沢　舟運の名残り今はなく　　敷かれし鉄路に拠るところ　甲駿交流夜明け也

14　市川大門花火まち　知恵の文殊は甲斐上野　　團十郎の出たところ　ゆめゆめ共々忘れなん

15　笛吹川を打ち渡り　見よや果樹やら野菜やら　　果樹王国と謳わるる　甲府盆地の花輪なる

16　四方の山に目をやれば　雲突く山脈いや高く　　老樹の深き善光寺　石和の湯けむり指呼の間

17　終点甲府は中央線　乗り継ぐ人も数多く　　躑躅ケ崎の夢のあと　武田の遺跡守れかし

18　時は人を替えれども　山梨静岡両県の　　明るく平和な郷づくり　身延線と共に栄えあれ

　　身延線と共に栄えあれ

【身延線の沿革】

1　創設の認可　　明治 44 年（西暦 1911 年）4 月 26 日
2　社名　　富士身延鉄道株式会社
3　資本金　　4 百万円
4　工事着工　　大正 2 年 1 月 8 日
5　部分開通　　大正 9 年 5 月 18 日　富士駅から身延駅まで汽車運行
6　全面開通　　昭和 3 年 3 月 28 日（1928 年）
　　富士駅～甲府駅　電車運行 88.4ｋｍ
7　国鉄移行　　昭和 16 年 5 月(1941 年)　日本国有鉄道　線名を身延線とす
8　民営化　　JR 東海　昭和 62 年 4 月(1987 年)
　　社名　JR 東海道旅客鉄道株式会社
9　付記　　身延線全線開通 80 周年行事と併せて富士宮駅高架化着工祝賀行事富士宮駅で開催　　平成 20 年 4 月 6 日（2008 年）

身延線下り	【始発】
	富士
	柚木
	竪堀
	入山瀬
	富士根
	源道寺
	富士宮
	西富士宮
	沼久保
	芝川
	稲子
	十島
	井出
	寄畑
	内船
	甲斐大島
	身延
	塩之沢
	波高島
	下部温泉
	甲斐常葉
	市ノ瀬
	久那土
	甲斐岩間
	落居
	鰍沢口
	市川大門
	市川本町
	芦川
	甲斐上野
	東花輪
	小井川
	常永
	国母
	甲斐住吉
	南甲府
	善光寺
	金手
	甲府（終点）